

商 業 科

事例 1 「ビジネス基礎」における思考力を高めるための展開と発問の工夫
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 134

事例 2 「財務会計Ⅰ」における思考力を高めるための展開と発問の工夫
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 142

事例 3 「ビジネス情報」における思考力を高めるための展開と発問の工夫
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 149

研究協力委員

栃木県立宇都宮商業高等学校	教諭	竹 中 直 子
栃木県立栃木商業高等学校	教諭	矢 野 勉
栃木県立高根沢高等学校	教諭	鈴 木 章 郎

研究委員

栃木県総合教育センター			
研究調査部	指導主事	大 山	晃

1 はじめに

『高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月）』の定めている、商業科の目標は以下のとおりである。

商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、ビジネスの意義や役割について理解させるとともに、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって行い、経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。

さらに『高等学校学習指導要領解説 商業編（平成 22 年 5 月）』では、商業の各分野の基礎的・基本的な知識と技術を習得させることについては、次のようにある。

資格取得や競技会への挑戦など目標をもった意欲的な学習を通して知識と技術の定着を図るとともに、単に知識や技術を習得させることにとどまらず、知識と技術を活用する上で必要となる思考力、判断力、表現力等を育成することが大切となる。

また、『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】（平成 24 年 6 月）』では、商業科での思考力、判断力、表現力の育成について、次のようにある。

ビジネスの諸活動に関する具体的な事例を取り上げ、考察、討論、発表などを行う学習活動や、ビジネスに関する具体的な課題を設定し、地域や産業界と連携して、様々な情報を収集・分析・評価し、発表するなどの学習活動を充実する。

そこで本研究では、思考力の育成を図るために「思考のすべ」（考えるための技法）を意図的に組み込み、生徒が討論や分析を行い、根拠や理由を基に自分の考えをまとめる授業展開を行った。

2 指導実践例

商業科全体の基礎的・基本的な科目である「ビジネス基礎」、会計分野の基礎的・基本的な科目である「財務会計Ⅰ」、ビジネス情報分野の基礎的・基本的な科目である「ビジネス情報」において思考力を育むための実践を行った。それは、思考力・判断力・表現力は、基礎的な技能や知識・理解の学習の完成を待って培われるものではなく、それらの学習と同時に培われるべきものであると考えたからである。各事例の概要を以下に示す。

事例 1 「ビジネス基礎」における思考力を高めるための展開と発問の工夫

本事例では、科目「ビジネス基礎」の単元「経済と流通の基礎」から「経済活動と流通」を取り上げた。ここでは、業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加した理由を、消費者ニーズや社会の変化を捉えながら考えさせた。

事例 2 「財務会計Ⅰ」における思考力を高めるための展開と発問の工夫

本事例では、科目「財務会計Ⅰ」の単元「財務諸表活用の基礎」から「財務諸表の見方」を取り上げた。ここでは、実在する企業の資料を基に、そこから読み取れる企業の経営成績や財政状態を分析し判断させることを通して会計情報活用の重要性について考えさせた。

事例 3 「ビジネス情報」における思考力を高めるための展開と発問の工夫

本事例では、科目「ビジネス情報」の単元「表計算ソフトウェアの活用」から「ビジネス計算」を取り上げた。ここでは、商品の出荷台数を複数のグラフを用いて表現させ、それぞれのグラフのもつ特徴を捉えさせることを通し、グラフを基にした分析の在り方について考えさせた。

<引用・参考文献>

文部科学省『高等学校学習指導要領解説 商業編』（平成 22 年 5 月）

文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】』（平成 24 年 6 月）

事例 1 「ビジネス基礎」における思考力を高めるための展開と 発問の工夫

1 本事例の概要

「ビジネス基礎」は、「ビジネスに関する基礎的な知識と技術を習得させ、経済社会の一員として望ましい心構えを身に付けさせるとともに、ビジネスの諸活動に適切に対応する能力と態度を育てる。」ことが目標となっている。

生産・流通・消費という経済の仕組みの中におけるビジネスの意義や役割など、ビジネスに関する基礎的な知識と技術を習得させることをねらいとして、ビジネスの諸活動に対する生徒の興味・関心を育みながら思考力を高めていくこと目指した。さらに、基礎的な知識を踏まえるとともに、今後のビジネス科目へ希望をもって学べることを目指した。

2 授業実践

(1) 単元名 経済と流通の基礎 「経済活動と流通（１）」

(2) 単元の目標

経済活動における流通の意義や役割について、生産から消費に至る役割分担の変化や業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加しているという変化と関連付けて理解させる。また、生活水準の向上や生産の高度化によって生産と消費の隔たりが大きくなり、流通の役割が大きくなっていることについても理解させる。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
①流通の機能や仕組みに関心をもち、それぞれの役割をどのような業者が担当しているか具体的な例を調べようとしている。	①業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加した背景について、消費者ニーズなどを踏まえて考えている。	①社会的分業が進むことで生じた隔たりや、隔たりを解消する担い手について得られた情報を読み取りまとめている。	①流通について、その歴史や発展の過程を踏まえ、経済活動において重要な役割を担っていることを理解している。

(4) 単元の指導計画と評価計画（3時間）

時間	○ねらい ・学習活動	評価の観点				評価規準（評価方法）
		関	思	技	知	
1	流通の役割と働き ○流通が経済活動の中で果たす役割や具体的な働きについて理解する。 ・流通の果たす役割について理解する。 ・社会的分業が進むことで生じた様々な隔たりと、隔たりを解消するための流通の働きについて理解する。				①	① 流通について、その歴史や発展の過程を踏まえ、経済活動において重要な役割を担っていることを理解している。（ワークシート） ② 社会的分業が進むことで生じた隔たりや、隔たりを解消する担い手について得られた情報を読み取りまとめている。（ワークシート）
2	流通のしくみ ○流通の仕組みについて、流通機構と流通経路を理解し、実際にどのような業者があるか具体的に調べる。 ・流通機構についてそれぞれの働きを理解する。 ・流通経路について、扱う商品の違いによる分類やその内容を理解し、具体的な業者について具体的に調べる。	①				③ 流通の機能や仕組みに関心をもち、それぞれの役割をどのような業者が担当しているか具体的な例を調べようとしている。（ワークシート）
3 （本時）	流通をとりまく環境の変化 ○流通をとりまく環境の変化により、業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加したことの背景を理解し、現在の業態の特徴について考える。 ・消費者ニーズやライフスタイルの変化、情報技術の進展により、小売業がどのように変化したかを考える。 理由付け ・なぜ業種としての小売店が減り業態としての小売店が増えたのか。消費者ニーズなどと結びつけて考える。		①			④ 業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加した背景について、消費者ニーズなどを踏まえて考えている。（ワークシート）

(5) 本時の内容

ア 本時のねらい

流通をとりまく環境の変化により、業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加したことの背景を理解し、現在の業態の特徴について考える。

イ 本時の展開（第3時）

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
導 入	1. 前時の学習を振り返る。	- 業種について学習したことを確認する。 - 業態について説明する。	
展 開	2. 小売業を業種と業態に分類してワークシートに書く。 3. よく行く小売店の利用する理由をグループで話し合う。 4. 業態に分類される小売店が増えたことと、消費のニーズの関係を考える。 予想される生徒の反応 - コンビニエンスストアは、登下校時でも営業しており、手軽に利用できるから。 - スーパーへ行けば、食材が一箇所で揃うから。 - ネットで注文すると、数日で自宅へ届くから。 - ネットならば、時間に関係なく注文ができるから。 5. これからの業態は、どのように発展していくのかを考えて、ワークシートに書く。	- 分けることが難しい小売業について販売方法や扱う商品から考えるように促す。 - 利用した理由が小売店の特徴に結びつくことに気付かせる。 - 身近なお店は、業種に分類される小売店よりも業態に分類される小売店の方が多いことに気付かせる。 - 自分たちのことに加えて、様々な人に目を向けるように促す。 教師の発問 なぜ業種に分類される小売店が減り業態に分類される小売店が増えたのか。消費者ニーズなどと結びつけて考えよう。（関係付け） - 通信機器等の発達による変化にも目を向けさせる。 「自分の考えるこれからの業態」についてまとめさせる。	4 業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加した背景について、消費者ニーズなどを踏まえて考えている。（ワークシート）

	予想される生徒の反応 ・ コンビニエンスストアが、一人暮らしのお年寄り向けのサービスを充実させる。 ・ 世界各地の商品をネット販売でより手軽に購入できるようなサービスを展開する。 ・ 自動化により余暇が増えることで、趣味を充実させるようなサービスが増える。	教師の発問 高齢化に伴い、行動範囲や世帯構成からどのようなニーズが考えられるか。また、グローバル化に伴い、世界中の商品を手に入れやすくなることで、消費者ニーズはどのように変化し、商品を扱う業者はどのように変化するかに着目して考えてください。さらに、技術の進展で自動化が進むとライフスタイルにどのような影響をもたらすかなども考えてください。(関係付け)	
	6. グループ内で発表し合う。	・ 消費者ニーズやライフスタイルの変化に伴う業態のさらなる変化について考えさせる。 ・ 少子高齢化やグローバル化の視点からも考えるように促す。 ・ グループ内全員が発表できるように促す。	
まとめ	7. 本時の学習を振り返る。	・ 本時の目標に基づいて振り返りをさせる。	

3 授業の様子

(1) 第1時・第2時

グローバル化が進む現在において、流通の果たす役割や働きがとても重要となっていることを扱った。その中で、流通の担い手として物的・商的・そのほかの流通として、担当する業者を説明した後に、具体的にどのような業者などが挙げられるか、生徒の身近なものを考えさせた。

また、流通の仕組みにおいて、流通機構や流通経路について説明を行い、具体的な業者でイメージをもちやすいものを考えさせることで、興味・関心の向上や知識の定着を図った。

(2) 第3時（本時）

ア 小売店を利用する理由を話し合う

生徒がよく利用する小売店について、なぜよく利用するのかをワークシート【資料1】に書いて話し合った。生徒からは、次のような意見が出た。

生徒の反応

- ・コンビニエンスストアは、通り道にある。
- ・コンビニエンスストアでは、よくおかしを購入している。
- ・スーパーマーケットは、生鮮食料品が安くて品ぞろえが豊富だから。
- ・ドラッグストアは、日用品が安いから。

生徒の様子

ほとんどの生徒がコンビニエンスストアを挙げ、業態に分類される小売店を主に利用していることを確認したようである。また、一人で買い物に行く際にはコンビニエンスストアを選び、保護者と一緒の時はスーパーマーケットへ買いに行くなど、買う品物の状況に応じて行き先が分かれている点が主な話題となった。また、先の話題から地域的な話に及び、コンビニエンスストアのその地域における役割について認識できたようだ。しかし、コンビニエンスストアへは友人と良く行くが、安売りやポイントセールなどの特売がないため、価格が高くなるなど、購入品目により生徒たちも使い分けている点が話題となった。

- イ 業種に分類される小売店が減少し業態に分類される小売店が増加した要因について考える
- 消費者ニーズやライフスタイルの変化に伴う小売業の変化について、自分たちだけでなく広く消費者をとらえ、その人達が生活の中でどのように購買活動を行っているか考えさせる。

教師の発問

業種に分類される小売店が減ってきて業態に分類される小売店が増えてきているのは、なぜだと思いますか。自分たちだけでなく、家族や社会全体の人のニーズやライフスタイルの変化などを想像しながら理由を考えてみましょう。

生徒の反応

- ・コンビニエンスストアは、会社などに出勤するサラリーマンやOLの方も利用している。
- ・スーパーマーケットのお惣菜コーナーでは、夜になると割引シールが貼られ、会社帰りの方が手にしている。
- ・八百屋や魚屋は、夜7時くらいには閉まってしまうので不便だから。
- ・休日の日中や夜遅い時間になると、テレビ番組の一つとして成り立つほどの通信販売番組が流れており、多くの方が購入しているのかなと想像できる。
- ・インターネットのポータルサイトなどでは、ネット販売のページをよく目にする。実際に小売店へ買い物に行くよりも安く購入できることや、いつでも注文できて自宅へ配達してくれることが魅力的である。ただ、私たち高校生はクレジットカードを持っていないため、利用があまりできない。

生徒の様子

生徒は、実際に利用している小売店を基に、生活のどの場面でどのように利用しているか考え、自分や家族、友人などのライフスタイルが関係していることを確認し、業種に分類される小売店が減り業態に分類される小売店が増えたことが、生活環境の変化によるものだとして認識できていた。また、マスメディアやインターネットなどの関わりも深くなってきていることを話し合っていた。

コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどについては、住んでいる地域に関係なく、いろいろな意見が書き出されていた。一部のグループでは、小売業の話題から住んでいる地域の話題になり、あまりお店のない地域に住んでいる生徒たちから、コンビニエンスストアなど

の小売業が生活に密着しており、多少高くても遠方のスーパーマーケットに買い物に行くよりも便利で生鮮食料品なども多く扱っているなど、その地域で果たす役割が大きいことを見いだすことができたようである。

ウ 自分の考えるこれからの業態

消費者ニーズやライフスタイルの変化、少子高齢化やグローバル化などにより、業態はどのように変化するか。

教師の発問

高齢化に伴い、行動範囲や世帯構成からどのようなニーズが考えられるか。また、グローバル化に伴い、世界中の商品を手に入れやすくなることで、消費者ニーズはどのように変化し、商品を扱う業者はどのように変化するかに着目して考えてください。さらに、技術の進展で自動化が進むとライフスタイルにどのような影響をもたらすかなども考えてください。

生徒の反応

- ・高齢者社会が進み、一人暮らしの高齢者が増加することが予測される。買い物は、あまり遠出せずに1回の買い物は少量であることからコンビニエンスストアが考えられる。コンビニエンスストアは、全国展開をしておりどの店舗でも商品に大きく差がないため、安心安全に買い物ができる。最近では、商品を配達してくれるコンビニエンスストアも出てきている。
- ・グローバル化により、世界中の商品を、インターネットを通して購入できるようになっており、品質や価格などのほかに、商品に関する口コミ情報などを参考に購入できる。このようなことから、流通業者との連携をより強化したり、独自に流通部門を持つ業者がさらに増えたりすることが考えられる。
- ・技術の進展により、自動車などをみても運転の自動化が進んできていることから、生活の中の自動化の進展により指示を与えれば後は機械が済ませてくれる。そこで、時間の使い方などが変わり、ライフスタイルが大きく変化していくことがあらたな業態を生み出す。

生徒の様子

これからの業態について考えさせたところ、思うように話し合いが進まない状況がみられた。そこで、考えるためのヒントとして3つの視点を与えた。この考えるための発問をしたところ、生徒は、それぞれの考えを出すことができ、お互いに意見を交換していた。また、コンビニエンスストアが地域の中で果たす影響を再確認し、まだまだ変化する部分があることに気付くことができていた。グローバル化や技術の進展については、高校生にとってやや見えにくい部分であったが、グローバル化については流通経路の授業での内容と関連付けて考えることができていた。技術の進展による業態の変化については、自動化をキーワードとした自動車の話題になっていたが、時間の使い方の変化による具体的なライフスタイルの変化や、そこから生み出される具体的な業態をイメージすることができなかった。

エ 授業アンケートについて

(ア) 普段買い物に行くお店について、興味・関心はありますか。

授業前は、小売業といっても生徒たちにすれば全てが「店」であり「商店」にすぎなかったようである。欲しい物があれば、どこへ買いに行けばよいのかというところは考えていたが、それぞれの店の種類や、売り方の特徴については全く考えていなかったようで、「小売業」についてという問いに興味をもったようである。

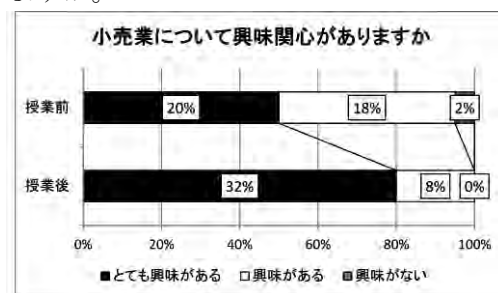


図1 授業アンケート結果

(イ) 授業を受けて、どのような点に興味がわきましたか。

- ・ いつも何気なく利用しているコンビニエンスストアやスーパーマーケットなどの特徴を調べることで、もう少し深く知りたいと思いました。
- ・ 消費者行動やライフスタイルの変化を考えて売ることが求められていることが分かりました。

授業後のアンケートでは、当たり前にあるお店にも売り手側としての考えがあり、その販売方法などに興味・関心をもつことができたようだ。

4 まとめ

(1) 成果

実際に生徒が買い物に出かけている身近な小売店が、消費者のライフスタイルの変化など様々な理由により変化しながら存在していることを考えさせることができた。

グループ学習を通して、発問に対しての回答や、自分の席の周りにいる生徒との意見交換をスムーズに行うことができた。内容に関しても身近な内容を扱うことで、生徒も活発に意見交換をする様子を見ることができたようである。このように、自分の意見を話し他人の意見に耳を傾けながら学習することによって、「業種」と「業態」という2つの基本的キーワードの理解が、辞書的定義に留まらず、実生活の背景を伴ったものとなった点は注目すべきである。また、品揃えや価格、営業時間や売り方などの販売方法を考えたことで、売り手の目線で小売業を見ようとする視点が現れた。このことも、ビジネス基礎に続く今後の学習における基本的な学習姿勢の確立として、注目しておきたい。

(2) 課題

今回は、業種と業態について身近に存在する小売店を扱ったため、生徒は多くの意見を出し、考えを深めることができた。しかし、生徒にとってあまりなじみのない内容の場合、活発に意見を交換し考えを深めることができるか疑問に感じた。例えば、上記ウの「生徒の反応」の3つめに見られるように、具体的なライフスタイルの変化やそこから生み出される業態のイメージができていない反応もあった。このような場合には、問いかけをより焦点化すること、および、求める思考のステップを細かくした問いかけをすることが大切である。すなわち、自動化に焦点を当てて、例えば主婦の生活時間にどのような変化を生じさせたかを推測させる。そこからライフスタイルの変化を考えさせ、そのニーズに応じた業態を想像させるといった学習である。

【資料1】 ワークシート

経済活動と流通 レポート

1年組番氏名

1. 小売業の種類について

業種	業態

2. 消費者ニーズの変化と小売業の変化

This image shows a single sheet of white paper with horizontal blue or grey ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are approximately 20 lines visible. The paper has a slightly textured appearance and is set against a dark background.

3. 「新しい業態について」

事例 2 「財務会計Ⅰ」における思考力を高めるための展開と 発問の工夫

1 本事例の概要

「財務会計Ⅰ」は、「財務諸表の作成に関する知識と技術を習得させ、財務会計の意義や制度について理解させるとともに、会計情報を提供し、活用する能力と態度を育てる。」ことが目標となっており、(1)財務会計の基礎、(2)貸借対照表、(3)損益計算書、(4)連結財務諸表、(5)財務諸表活用の基礎の5項目で構成されている。今回の研究では、(5)財務諸表活用の基礎に焦点を当て、財務諸表分析の意義及び財務諸表の見方を取り扱い、財務諸表を活用するための基礎的な知識と技術を習得させる中で思考力を育むことをねらいとした。

そのため、本事例では、財務指標の具体的な例を用いて、グループごとに企業の財務諸表を分析し、そこから読み取れる企業の経営成績や財政状態を分析・判断させ発表させた。これらの学習活動を通して、他者の意見を踏まえながら自らの考えを深めさせた。

2 授業実践

(1) 単元名 財務諸表活用の基礎 「財務諸表の見方」

(2) 単元の目標

財務比率などの財務指標の意味と計算方法を習得させる。また、財務指標の具体的な例を用いて、同一企業における期間比較や同業他社比較を行わせることを通して、収益性や安全性などの面から企業の実態を分析する方法を習得させる。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
①財務諸表分析に関心を示し、分析方法について意欲的に調べようとしている。	①財務諸表分析結果を基に企業の状況やその原因を考えることができる。	①関係比率法・実数法を用いて計算を行い、計算結果を整理し、まとめることができる。	①財務諸表分析に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。 ②関係比率法・実数法に関する分析の目的と算出方法について理解している。

(4) 単元の指導計画と評価計画（４時間）

時間	○ねらい ・学習活動	評価の観点				評価規準（評価方法）
		関	思	技	知	
1	財務諸表分析の意味と方法 ○財務諸表分析の意味や方法を理解する。 - 財務諸表分析の方法について意欲的に調べようとしている。 - 財務諸表分析について、その意味と方法について理解する。	①			①	① 財務諸表分析に関心を示し、分析方法について意欲的に調べようとしている。（ワークシート） ② 財務諸表分析に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。（ワークシート）
2・3	関係比率法・実数法による分析 ○関係比率法・実数法による分析の種類を理解し、それぞれの計算方法を習得する。 - 関係比率法による分析を理解しそれぞれの値を算出する。 - 実数法による分析を理解し、必要な箇所を読み取る。			①	②	③ 関係比率法・実数法に関する分析の目的と算出方法について理解している。（ワークシート） ④ 関係比率法・実数法を用いて計算を行い、計算結果を整理しまとめることができる。（ワークシート）
4 (本時)	財務諸表分析の実際 ○財務諸表や関係比率の算出結果を基に企業について多面的に比較・判断し分析する。 - 企業の関係比率の算出結果を基に企業について分析し総合的に判断し評価する。 理由付け - 各比率について前年度と比較し、増減を基に判断し、その理由についても考える。		①			⑤ 財務諸表分析結果を基に、企業の状況やその原因を考えることができる。（ワークシート）

(5) 本時の内容

ア 本時のねらい

財務諸表や関係比率の算出結果を基に、企業について多面的に比較・判断し分析する。

イ 本時の展開（第4時）

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
導入	1. 前時までの学習を振り返る。	・ 前時までに算出した各関係比率について確認する。	
展開	2. 期間比較による収益性や安全性の分析をグループごとに行う。 予想される生徒の反応 ・ 安全性については、〇〇率が増加（減少）しているので、高まっている（低くなっている）と判断できる。なぜなら、〇〇だからである。 ・ 収益性は、〇〇率が増加（減少）しているため、良化（悪化）していると判断できる。 3. 分析結果をグループごとにまとめ発表する。 4. 同業他社との分析をグループごとに行う。 予想される生徒の反応 ・ 安全性については、〇〇率が、〇社の方が良い。△△率は、△社の方が良い。〇〇率を重視すれば、〇社の方が優れている。 ・ 収益性については、〇〇率が〇社の方が良い。△△率は、△社の方が良い。〇〇率を重視すれば、〇社の方が優れている。 ・ 総合的に判断すると、〇社のほうが優れている。 5. グループごとに、同業種2社の財務分析結果を、ワークシートにまとめる。	・ 実在する企業について、過去2年間の財務諸表分析結果を比較させ、増減の背景を考えまとめさせる。 教師の発問 各比率について前年度と比較し、増減や指標となる値を基に収益性や安全性の分析をしてください。また、なぜそのように分析したか読み取った数値などを基に、その理由についてまとめてください。（理由付け） ・ 発表したグループの各比率と自分たちの分析した結果を収益性や安全性の視点で比較させ考えさせる。 教師の発問 企業の収益性や安全性についてより優れている方は、どちらの企業と考えられるか。一つ一つの比率を分析した後、それぞれの優れている点を確認し、特に優れている部分に着目してみましょう。（比較） ・ 収益性、安全性それぞれを比較させ、より優れている企業についてそう考えた理由などを盛り込みまとめるよう促す。 ・ 財務諸表分析結果を考察させながら、企業の財務諸表の活用の仕方を確認させる。	5 財務諸表分析結果を基に、企業の状況やその原因を考えることができる。（ワークシート）
まとめ	6. 本時のまとめをする。	・ 本時の目標に基づいて振り返りをさせる。	

3 授業の様子

(1) 第1時

生徒は、財務諸表を今までの学習の中で何度も目にしていたが、実際の企業の財務諸表を目にする機会があまりなく、興味をもって勘定科目などを確認していた。また、今までの授業で学習した内容が実務につながっていることを理解し、財務諸表分析の意味や方法を理解しようと意欲的に授業に取り組むことができていた。

(2) 第2時・第3時

関係比率の計算では、学習した計算式を基に各比率について適切に算出することができていた。また、同じグループの中で、それぞれの比率の意味についても確認しているようであった。

(3) 第4時（本時）

ア 企業の期間比較による財務分析

グループごとに実在する企業の過去2年分の比率の算出結果を用いて、収益性や安全性について分析を行い、ワークシート①にまとめる。

教師の発問

各比率について前年度と比較し、増減や指標となる値を基に収益性や安全性の分析をしてください。また、なぜそのように分析したか読み取った数値などを基に、その理由をついてまとめてください。

生徒の反応

A社

固定資産の増加がみられるため、今後の収益が見込まれると考えられる。しかし、同時に負債比率が増加していることから、他人資本による規模の拡大が考えられる。しかし、当期は収益性の視点から考えると、その値は悪化していた。これは、特別損失の増加が大きく関係していると考えられる。

B社

売上高純利益率や自己資本利益率が、やや上昇しているため収益性が高まっていると考えられる。しかし、売上原価率が若干増加しているため、商品の売り上げによる収益率の増加と考えることが難しい。安全性の面から考えると、流動比率や当座比率は指標となる値からは大きく離れるが、国内の企業の基準で考えるとやや劣る程度と読み取れる。

生徒の様子

グループごとの話し合いの中でそれぞれ意見を出し合い、それぞれの比率を比べながら企業を収益性や安全性の視点から分析していた。しかし、ワークシート①にまとめる際、話し合った内容をなかなか記述できない生徒に対して、どの数値がどのように変化したか整理してまとめるよう助言した。また、ワークシート①へまとめ、発表する中で、財務諸表分析から読み取れる企業の評価について理解を深め、増減の理由について自分たちの考えを発表することができていた。



図1 授業の様子

イ 同業他社との比較による財務分析

それぞれ企業の分析結果の発表後、同業種 2 社について比較分析し、ワークシート②にまとめる。

教師の発問

企業の収益性や安全性についてより優れている方は、どちらの企業と考えられるか。一つ一つの比率を分析した後、それぞれの優れている点を確認し、特に優れている部分に着目してみよう。

生徒の反応

・収益性の視点

固定資産回転率を見るとわずかであるがA社の方が良い。しかし、売上高売上総利益率や売上原価率を見るとB社の方が良い。

収益性の視点からB社の方が優れていると判断した。

・安全性の視点

流動比率は、どちらの企業とも望ましいとされる 200%を大きく下回っており、さらに国内で一般的に望ましいとされている 120%も下回っているため、両社とも優れているとは言えないがB社は 100%近くある。当座比率も同様に望ましいとされている値を下回っているが、2社を比較するとB社の方が高い。純資産負債比率を見ると、B社は 100%を下回っているため長期的な面で考えると安全であると判断できる。固定長期適合率は 100%を超えない方が安全であるといわれており、A社は 100%を下回っているため安全であると判断できる。しかし、B社は 100%を超えているため長期的な視点からは安全と言い切れない。

安全性の視点からB社の方が若干ではあるが優れていると判断できる。

・総合的な判断

総合的に、B社はA社よりも優れていると判断できる。

生徒の様子

2社の比較・分析について、ほとんどの生徒が指標となる数値などを基にどちらが優れているか判断し、その根拠を盛り込みながらワークシート②へまとめることができていた。数名の生徒は、項目ごとの比較はできるものの、多面的に判断することが難しい様子でなかなかまとめることができなかった。そのような生徒に対しては、2社の財務諸表分析結果について一つ一つ考えた根拠などをまとめさせた。

4 まとめ

(1) 成果

生徒は、期間分析において自分一人で考えようとするとなかなか考えがまとまらず、記入ができない様子であったが、グループの中で話し合いをする中で、「何をどのように」記入したらよいか理解できたようで、各自自分の考えをまとめることができていた。これは「グループ内で積極的に話し合いができたか」という質問に対して、80%の生徒が「積極的に参加できた」と答えていることから、グループ内で話合うことにより判断や思考を深めることができたと考える。

さらに、「財務分析をする際、資料を十分に活用することができたか。」や「財務諸表の分析方法について、理解しているか。」や「財務諸表を分析することに対し、理由を考えられるか。」の質問に対して、事後アンケートでは90%の生徒が「とてもそう思う」・「そう思う」と回答し、「機会があれば、ほかの会社についても分析してみたいか。」に対して、事後アンケートでは 80%の

生徒が「とてもそう思う」・「そう思う」と回答した。これらは、今回の学習を通して、財務諸表分析についてどのように分析したらよいか理解できたからだと考えられる。(図2、図3、図4、図5) また、グループワークを行い他者と意見交換させたことで、全員が自分の言葉でワークシートにまとめることができた。

(2) 課題

今回の授業では、意図的な発問により、生徒がよく考え、期間分析について総合的に比較・判断することができた。しかし、他社との比較をする中で、ある一点についての増減を比較することができても、複数の項目を総合的に分析することが難しいと感じていたようであった。しかし、このような多面的・総合的な分析・判断能力こそ、利害関係者への適正な会計情報の提供及び提供された会計情報の活用を行うために必要な力であると考えられる。その力を培うには、データを企業戦略の見直しのために用いるといった場面だけでなく、投資家や金融機関の立場で分析・判断するといった他者視点を持たせる必要があり、そのための具体的な活用場面を設定した学習の展開や発問の工夫が求められる。

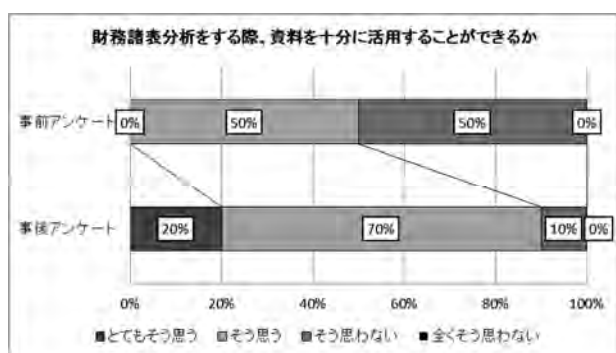


図2 アンケート結果

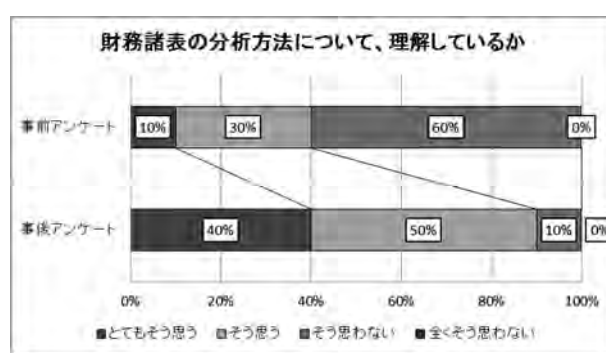


図3 アンケート結果

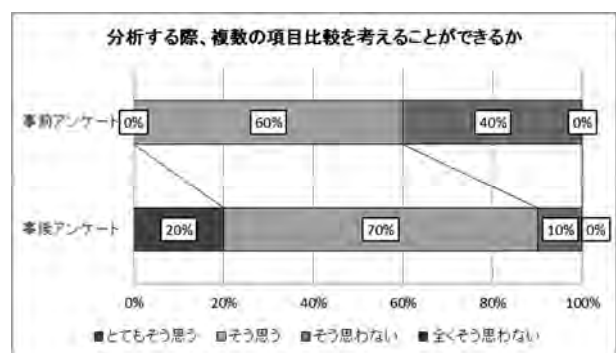


図4 アンケート結果

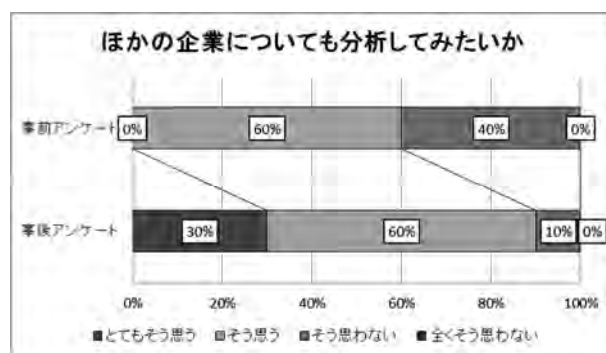


図5 アンケート結果

【資料】ワークシート

ワークシート ①

2年 組 番 氏名

○[]社の財務分析結果をもとにそれぞれの視点で、分析をしない。

財 務 比 率	平成 26 年	平成 27 年
売 上 高 売 上 総 利 益 率	%	%
売 上 原 価 率	%	%
自 己 資 本 利 益 率	%	%
固 定 資 産 回 転 率	回	回
流 動 比 率	%	%
当 座 比 率	%	%
総 資 産 負 債 比 率	%	%
固 定 比 率	%	%
固 定 長 期 適 合 率	%	%

分析 1 総合的に判断すると、当期は前期に比べて安全性において、[]。

理 由 短期の安全性の視点

.....

.....

.....

長期の安全性の視点

.....

.....

.....

分析 2 総合的に判断すると、当期は前期に比べて収益性において、[]。

理 由 収益性の視点

.....

.....

.....

ワークシート①

ワークシート ②

2年 組 番 氏名

○下記の 2 社の財務分析結果をもとにそれぞれの視点で、比較し分析をしない。

財 務 比 率	A 社	B 社
売 上 高 売 上 総 利 益 率	%	%
売 上 原 価 率	%	%
自 己 資 本 利 益 率	%	%
固 定 資 産 回 転 率	回	回
流 動 比 率	%	%
当 座 比 率	%	%
総 資 産 負 債 比 率	%	%
固 定 比 率	%	%
固 定 長 期 適 合 率	%	%

分析 1 総合的に判断すると、[] 社は、[] 社より優れている。

理 由

安全性の視点

.....

.....

.....

収益性の視点

.....

.....

.....

.....

ワークシート②

事例3 「ビジネス情報」における思考力を高めるための展開と 発問の工夫

1 本事例の概要

「ビジネス情報」においては、「情報通信ネットワークの導入やソフトウェアの活用に関する知識と技術を習得させ、情報を効率的に処理することの重要性について理解させるとともに、ビジネスの諸活動においてコンピュータを適切に運用する能力と態度を育てる。」ことが目標となる。

本単元では、表計算ソフトウェアの活用に関する知識と技術を習得させることや情報を効率的に処理することの重要性について理解させ、ビジネスの諸活動においてコンピュータを適切に運用する能力と態度を育てることをねらいと考えた。

そこで、意図的に発問を設定し思考力を効果的に高めることで、情報を処理するための分析能力を深化させようと考えた。特に本事例では、分析結果など「理由付け」をさせることで理解や思考力の育成に効果的であると考え実践した。

2 授業実践

(1) 単元名 表計算ソフトウェアの活用 「ビジネス計算とデータの集計・分析」

(2) 単元の目標

表計算ソフトを利用し、分析するために必要な表やグラフの作成方法を習得するとともに、ファンチャートやZチャート、PPM分析の有意性を理解し効果的な分析方法を習得する。また、財務分析の基本的な知識を身に付け、各種の比率や値の算出方法を習得する。

(3) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
① PPM分析に関心をもち、市場でのポジションからどのような戦略が必要となるか調べようとしている。	① グラフの特徴を考え、分析する内容から適しているグラフを判断し、分析した結果について理由とともに表現している。	① 分析に必要な販売情報を読み取り、表計算ソフトウェアを利用してファンチャートを作成することができる。 ② 表計算ソフトウェアを利用して、分析目的に即したグラフを選択することができる。	① 中長期的な分析に適しているZチャートの特徴を理解している。 ② 関係比率の算出方法について、その計算方法を理解している。 ③ 損益分岐点による分析方法を理解している。

(4) 単元の指導計画と評価計画（6時間）

時間	○ねらい ・学習活動	評価の観点				評価規準（評価方法）
		関	思	技	知	
1	売上を用いた分析 1 ○ファンチャートは売上の伸び率を明確化するために適したグラフであることを理解するとともに作成方法を習得する。 - 商品別伸び率を算出する。 - 商品別売上推移ファンチャートを作成する。 - 作成したファンチャートより商品の伸び率について分析する。			①		1 分析に必要な販売情報を読み取り、表計算ソフトウェアを利用してファンチャートを作成することができる。 （ワークシート）
2 （本時）	売上を用いた分析 2 ○Zチャートが複合的な推移や傾向を把握するために適したグラフであることを理解し、それに基づいて活用場面を考える。 - Zチャートの作成方法を理解する。 理由付け - 折れ線グラフを分析し、変化の理由を考える。 - 折れ線グラフの特徴について考えまとめる。 - Zチャートを作成する。 理由付け - Zチャートから、今後の出荷台数を予測し、その理由を述べる。 - 折れ線グラフとZチャートそれぞれのメリットを考え、それを理由としてそれぞれの活用場面を考える。		①	①		2 中長期的な分析に適しているZチャートの特徴を理解している。（ワークシート） 3 グラフの特徴を考え、分析する内容から適しているグラフを判断し、分析した結果について理由とともに表現している。（ワークシート）

3	売上を用いた分析 3 ○ PPM分析は商品販売を戦略的に分析するためには有効な手法であることを理解する。また、PPM分析をするにあたってバブルチャートは有効なグラフであることを理解するとともに作成方法を習得する。 - 商品市場占有率と売上高伸び率によって4つのポジションに分類する。 - 市場でのポジションからどのような戦略をとることになるのか調べる。 - バブルチャートを作成し特徴について考える。 - PPM分析グラフ結果からポジションの分類を行う。	①				④ PPM分析に関心をもち、市場でのポジションからどのような戦略が必要となるか調べようとしている。(ワークシート)
4	財務諸表分析 ○ 関係比率を使った分析の特徴を理解し、分析方法を理解している。 - 比率にはどのようなものがあるのかをまとめる。 - 分類した理由を考え、グループで意見を交換する。 - グループごとに意見をまとめ発表する。 - 企業の財務データを分析する。			②		⑤ 関係比率の算出方法について、その計算方法を理解している。(ワークシート)
5	財務諸表分析 ○ 百分率損益計算書を作成することができ、企業の経営状態を分析することができる。 - 百分率損益計算書で示されている各比率を挙げる。 - 使用されている分析方法をまとめる。 - 百分率損益計算書を作成する。 - 売上高を基準としていることでどのようなメリットがあるのかを考える。			②		⑥ 表計算ソフトウェアを利用して、分析目的に即したグラフを選択することができる。(ワークシート)

	・百分率損益計算書を使ったグラフを作成する。					
6	損益分岐点 ○損益分岐点による分析方法を理解するとともに、表計算ソフトを利用して損益分岐点のシミュレーションができる。 ・売上高の増減と、利益と費用の関連性について考えまとめる。 ・目標売上高を算出する。 ・表計算ソフトを利用して損益分岐点をシミュレーションする。				③	7 損益分岐点による分析方法を理解している。 (ワークシート)

(5) 本時の内容

ア 本時のねらい

Zチャートが複合的な推移や傾向を把握するために適したグラフであることを理解し、それに基づいて活用場面を考える。

イ 本時の展開（第2時）

	学習活動	指導上の留意点	評価規準（評価方法）
導入	1. 本時の学習課題を確認する。	・本時で取り上げるデータについて確認する。	
展開	2. 月別の出荷台数を表す折れ線グラフを作成する。 予想される生徒の反応 折れ線グラフからは、月々の動向について簡単に読み取ることができる。 年度間の比較についても出荷台数の多い年、少ない年を読み取ることができる。 3. ペアで意見を交換させたのち、各自ワークシートに考えをまとめる。 4. Zチャートを作成し、ペアで意見交換する。	・グラフ作成の手順について説明を行う。 教師の発問 今まで学習したグラフの中から、パソコンの出荷台数の推移を表すグラフを作成し、そこから読み取れるデータを分析してください。分析については、なぜ増加や減少したのかその理由も考えましょう。 さらに、今後の出荷の傾向について予測してみてください。(理由付け) ・ワークシートにまとめる際、理由も記入するように指示する。 ・Zチャートの基となる表を作成するとき、累計と移動合計を計算させる。	2 中長期的な分析に適しているZチャートの特徴を理解している。 (ワークシート)

	予想される生徒の反応 Zチャートでは、2013年度はほぼ横ばいで後半に若干伸びがあり、2014年度は、移動合計が右下がりであることから大きく減少していることが分かる。 5. 折れ線グラフとZチャートのメリットから、それぞれの活用場面を考えワークシートにまとめる。	教師の発問 2年分のグラフから、今後の出荷台数の傾向を予測してみましょう。また、その理由を調べワークシートにまとめましょう。(理由付け) ・中長期的な視点を特に考えさせる。 教師の発問 折れ線グラフとZチャートを比べ、それぞれのメリットについて考えてみましょう。また、それぞれのグラフは、どのような場面で用いると効果的か考えましょう。(理由付け)	3 グラフの特徴を考え、分析する内容から適しているグラフを判断し、分析した結果について理由とともに表現している。(ワークシート)
まとめ	6. 本時の学習内容を振り返る。	・本時の内容について、自分の考えを整理しまとめさせる。	

3 授業の様子

(1) 第2時(本時)

ア 月別折れ線グラフの分析

パソコンの出荷台数を折れ線グラフ化し、出荷傾向がどのような傾向であるか考えさせる。
また、なぜそのような答えになったのか理由付けさせる。

教師の発問

今まで学習したグラフの中から、パソコンの出荷台数の推移を表すグラフを作成し、そこから読み取れるデータを分析してください。分析については、なぜ増加や減少したのかその理由も考えましょう。さらに、今後の出荷の傾向について予測してみてください。

生徒の反応

2013年の出荷台数が一番多く一番低い年は2014年なので、2年間の比較では減少している。しかし、2012年から2013年は増加している。

また、どの年も6月、9月、12月、3月の出荷台数が増えている。これは、新製品の発売時期がこの4つの月になるからだと考えられる。

さらに、1月から3月にかけて出荷台数が伸びている。これは、新年度の準備のために多くの人が購入するからだと考えられる。

今後の出荷については、過去3年間の傾向を考え減らしていく必要はあるが、月々の増減については、3年間の傾向を踏まえて出荷の計画を立てるとよい。

生徒の様子

折れ線グラフから各月の出荷台数を読み取ることは、全員できていた。また、年度ごとの増減についても適切に判断することができていた。しかし、今後の出荷台数の傾向については、過去の実績から減少するという点については折れ線グラフでも読み取れるが、傾向についてはペアごとに意見が分かれていた。

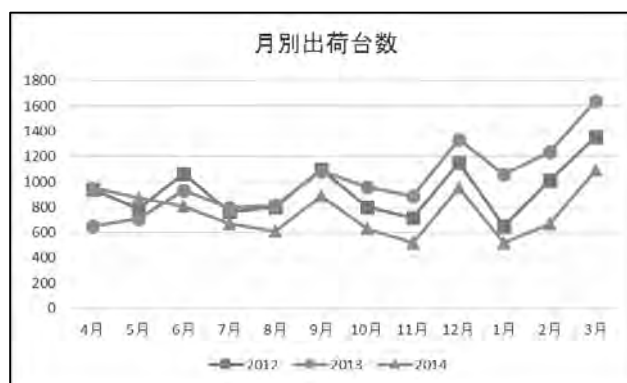


図1 月別折れ線グラフ

イ Zチャートの分析

過去3年分の出荷台数から2つのZチャートを作成し、出荷傾向を考えさせる。また、なぜそのような答えになったのか理由を考えさせる。

教師の発問

2年分のグラフから、今後の出荷台数の傾向を予測してみましょう。また、その理由を調べワークシートにまとめましょう。

生徒の反応

2013年はほぼ横ばいで後半に若干伸びがあり、2014年は移動合計が右下がりであることから出荷台数は大きく減少していることが分かる。また、移動合計は、2014年の5月がピークとなっている。これは、前年6月からの1年が最も売れたことを示している。今後の予想としては、パソコンの出荷台数は、減少傾向にあると考えられる。

生徒の様子

Zチャートを用いての比較では、移動合計を比べれば増減の傾向をつかめることが理解できていた。また、年間の累計を比較することで、2013年度よりも2014年度の8月以降、大きく下がっている点も確認していた。移動合計は、その月を含む過去12か月の合計であり、2013年度の後半の出荷台数が増加しているにもかかわらず、2014年度の後半に大きく減少していることから、月ごとの変動(季節変動)に左右されることなく増加・減少の傾向がつかめることを説明したところ、生徒はZチャートの特徴について理解できていた。減少の理由については、パソ



図1 授業の様子

コン以外の機器の出荷の動向を調べているようであったが、OSのサポート終了の話題を示すと、買い替えの需要が増減に大きく関わっていることも理由の一つとして考えていた。

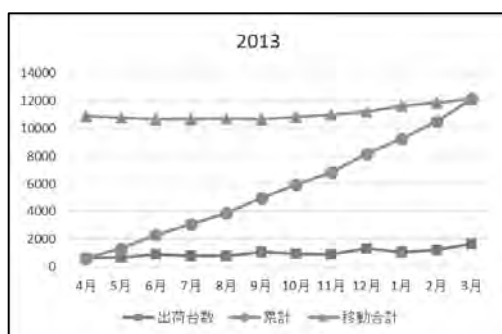


図2 出荷台数 (2013 年度)

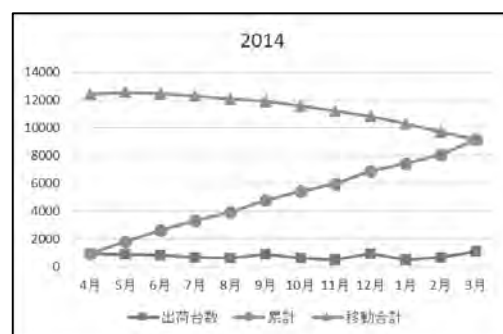


図3 出荷台数 (2014 年度)

ウ 折れ線グラフとZチャートの分析

折れ線グラフとZチャートを比較し、それぞれのメリットについて理由を含めて考える。

教師の発問

折れ線グラフとZチャートを比べ、それぞれのメリットについて考えてみましょう。また、それぞれのグラフは、どのような場面で用いると効果的か考えましょう。

生徒の反応

折れ線グラフは、Zグラフに比べ月々の動向がはっきりと分かり、前の月との差を比較しやすい。また、複数年を並べることで、昨年と同じ月との比較ができる点がメリットとして考えられる。

Zグラフは、月々の折れ線の変化がほとんど見られなくなる。これは、縦軸の間隔が異なるためである。移動合計により右上がり、横ばい、右下がりなどにより過去1年分の中期的な視点で出荷の傾向を確認することができる。また、累計を見ることで、いつ頃から値が増加・減少したかも読み取ることができ、3月を確認することで年間の総数が把握できることがメリットとして考えられる。

折れ線グラフは、過去のデータを基に月々の計画など短期間の計画を立てることに活用できると考えられる。Zチャートは、今後の増減の傾向がつかみやすいので数ヶ月先などの将来の見通しを考える場面での活用が考えられる。

生徒の様子

異なる2種類の折れ線グラフを比較させることで、それぞれのメリットを確認することができていた。さらに、メリットを考えさせることで、グラフの特徴を捉えることができていた。生徒は、データのまとめ方にも注目しており、出荷台数を月別にグラフにするだけでなく、年間の累計や移動合計を計算したものをデータとしてグラフ化することで、広い視点で分析できることにも気付くことができた。

4 まとめ

(1) 成果

本事例は、意図的な発問をすることで知識と技術の習得を深化させるとともに、思考力を効果的に高めることを目的とし実践を行った。特に、根拠となる「理由」を考えさせることで、次のような成果があったといえる。

出荷台数の推移の原因という視点を与えグラフを比較させたことで、グラフから読み取れる情報を基に分析ができるようになった。さらに、Zチャートの比較から、中長期的な視点での分析の重要性を理解できるようになった。折れ線グラフとZチャートを比較しそれぞれのメリットを明らかにしたことで、それぞれのグラフの有意性を理解し、特徴を述べられるようになった。さらに、それを根拠として、それぞれの活用場面を考えることができた。

アンケート結果（図8）からみても、これらの活動を通したことで生徒は、グラフによって分析できる内容が異なることについて考えられるようになったといえる。従来の指導法では、表計算ソフトを利用しデータ分析に求められる表、グラフの作成方法の習得に重きが置かれる。一方、分析のポイントを意図的に示したことで、生徒は「目的に応じてグラフを選択する」という視点をもてるようになった。これは一定の成果といえよう。そして、自分が選んだ理由について目的とグラフの特徴を結びつけて論理的に述べられるようにもなった。これは、思考力の深化が判断力・表現力につながったものと考えられる。

(2) 課題

思考力を高めるために、自己の考えをまとめ他者と意見を交わすことが重要なポイントとして挙げられる。本事例でも、ペアワークにより他者と意見を交わす学習活動を取り入れた。こうした活動により、グラフの特徴などについて、深く考えさせることができた。しかし、今回取り扱ったグラフをビジネスの場面で具体的にどのように用いて分析を行うのかまでは発展させることができなかった。具体的なビジネス場面に応じた分析を行うためには、グラフの特徴をきちんと捉えた上で、その知識を市場調査や商品計画などの学習につなげていくことが重要であると考えられる。

また、学習活動をより充実させるためにも、時間配分を考え直す必要があると感じた。生徒の熟考する時間、反応を見る時間に余裕をもたせることで、より生徒の意見を授業に反映させることができたものとする。

アンケート結果

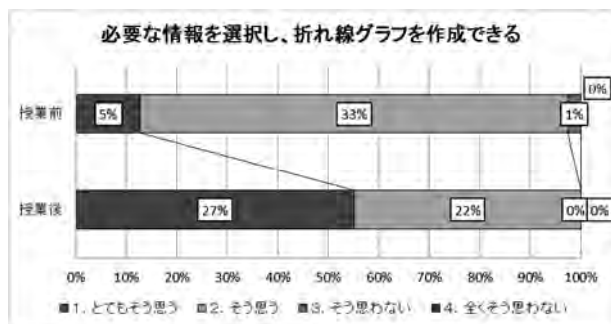


図4 アンケート1

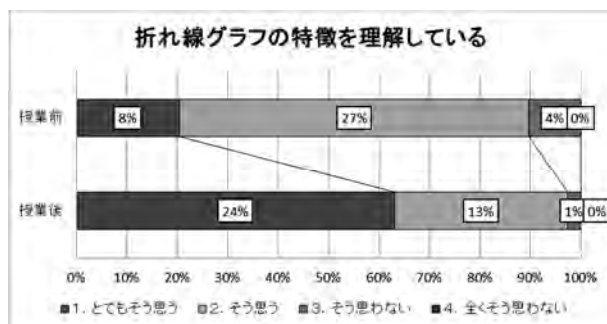


図5 アンケート2

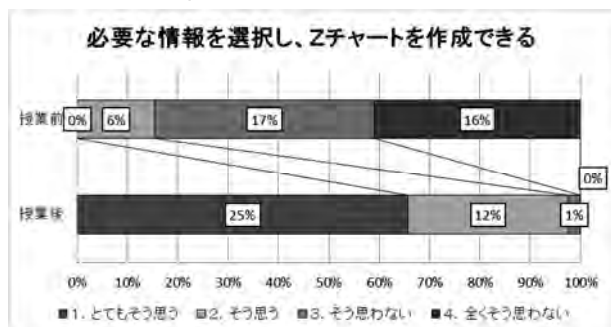


図6 アンケート3

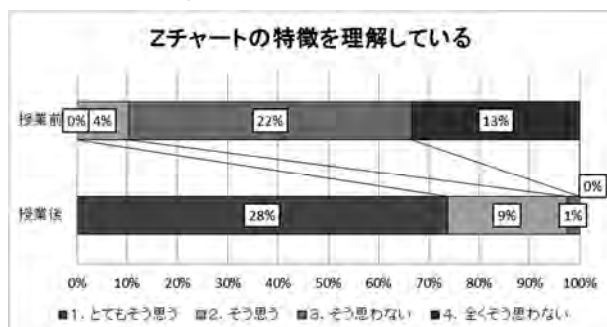


図7 アンケート4

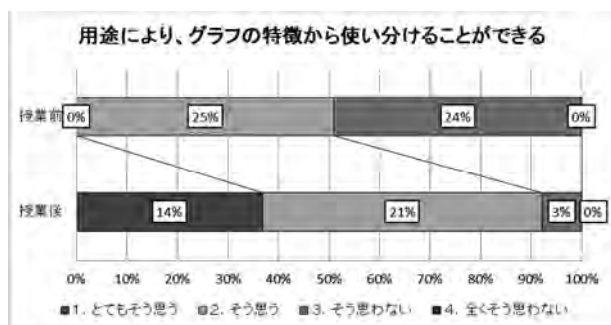


図8 アンケート5

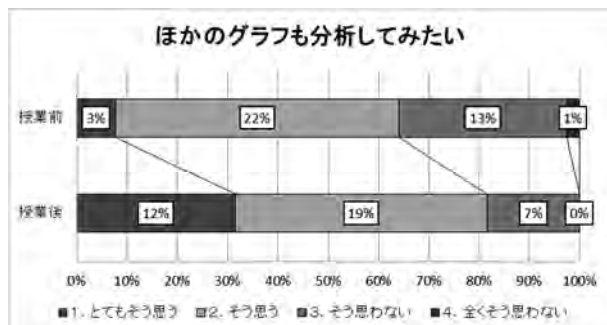


図9 アンケート6

ワークシート

2 年 組 番 氏 名 _____

1. 二つの出荷データを使用して、折れ線グラフを作成しよう。
2. 折れ線グラフをみて、出荷台数は増加傾向にあると思いますか？
それとも減少傾向にあると思いますか？理由をつけて教えてください。

増加傾向 ・ 減少傾向 にあると思う。

なぜなら

3. 折れ線グラフをみて特に気になったところを挙げましょう。

4. 二つの出荷データを使用してZチャートを作成しよう。
5. Zチャートをみて、出荷台数は増加傾向にあると思いますか？
それとも減少傾向にあると思いますか？理由をつけて教えてください。

増加傾向 ・ 減少傾向 にあると思う。

なぜなら

6. 意見を交換して気付いたことを挙げてみよう。